

**8月29日（日）10:30～12:00**



## メルロ＝ポンティでときめく！？

—メルロ＝ポンティの言語論と思考と言語の表現活動—

西口光一（大阪大学）

話題提供者の関心は、個別言語への関心を基礎とした言語教育から離脱して、言語の本質を見極めた上で言語教育を構想することであり、そのための言語の本質についての考究を深めることである。そうした作業をしないと、人文学の一分野として自立した言語文化教育学を確立することができないと考えている。そのような関心と問題意識の下に、これまでも心理学や社会学や人類学等の理論の探究に取り組んできた。そして、この数年は、哲学の歴史をも展望しつつ、近代哲学から現代思想への移行の重要な契機の一つとなった現象学を背景としてメルロ＝ポンティの思想に取り組んできた。本セッションは、そうした研究の成果を報告し、メルロ＝ポンティの思想と言語文化教育の関連を検討しようとするものである。

話題提供者は、言語現象を軸としてメルロ＝ポンティの思想を検討した。今回の話題提供での注目点を、哲学的な用語は文末（ ）内で示して、箇条書きにすると、以下ようになる。

1. わたしたち人間は時間的・空間的な特定の位置に居て、そこにおいて生きることを営んでいる（世界内存在）。こうした視点に基づく思想を現象学の当面の到達点と見ている（ハイデガーの実存の現象学）。
2. 世界というのはあらかじめそこにあるのではなく、人が文化歴史的な身体を基点としてそれに向かって生きることを営もうとすることで立ち現れるものである。そして、その当事者自身もその立ち現れた世界をまさに経験している者として存在する。
3. 一般にノエシス（経験の仕方）-ノエマ（経験されるもの）相関として説明される志向性（intentionality）は作用志向性である。メルロ＝ポンティはそれとともに、後期フッサールが提示した作動的志向性に注目する。
4. 作動的志向性とは、ごくわかりやすく言うと、2のような世界と当事者を時々刻々に現成させる働きである。
5. 言語（langage）のシンボル化機能は作動的志向性の一部だと見ることができる。
6. 言語は、イントネーションを媒介項として、具体的な語系列に至ることができる。イントネーションには生命体の活力が吹き込まれている。
7. 発話とは「イントネーションという舟の上に乗った語系列」である。

このようにメルロ＝ポンティの現象学と言語論を確認した上で、その思想の意義や示唆や洞察を参加者といっしょに考えたい。

参加予定の皆さんには当日までの「頭をこなす」作業として以下のようなテーマについて考えてほしい。

教室にいる学習者一人ひとりも上の1から4のように世界と自己を現生しつつ新たな言語（langage）である日本語を身につけようとしている。そして、そうした学習者の経験の基本は直接あるいは間接に教師が「演出」している。自身の言語文化教育の実践でどのような経験を学習者に提供してきたか、また、その経験はどのような蓄積となって学習者の言語文化コンピテンシーの育成に貢献しそうか、などを振り返ってみてください。

また、言語論へとつながる「メルロ＝ポンティの現象学」に関心のある方には、『知覚の現象学』の序文（pp.1-24）の繙読をすすめる。